

身体測定時に捉えた小学校3～6年生の児童の健康に関する 疑問からつくる「からだの学習」の効果

令和3年度入学
熊本大学大学院 教育学研究科
教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース
松本 有希

実践報告書要旨

1. 背景

児童が、心身ともに健康的に生きていくために、生涯にわたり自らの生活習慣を形成していけるような資質・能力を育んでいく必要がある。

そのため学校における保健教育では児童生徒が健康に関する知識を身につけることや、必要な情報を自ら収集し、適切な意思決定や行動選択を行い、積極的に健康な生活を実践することのできる資質・能力を育成することが大切であると言われている。

しかし七木田や数見によると保健教育の課題として、結論が見えていることから学びが生まれにくいことや、子どもたちに健康的な生活を実行させたいがために、指示的、しつけ的、おどし的になることが指摘されている。これらのことから「なぜ望ましい生活習慣が大切なのか」ということを児童が納得を伴って理解できないままの指導に陥りやすいという課題があると思われる。

2. 研究の目的

本研究では、小学校3～6年生の児童を対象に、自身の成長に関して関心の高まる機会である身体測定時に捉えた児童の疑問から教材を掘り起こして「からだの仕組みを学ぶ学習」(からだ学習)を実践することで、児童が主体的に保健に関する学習に取り組み、「なるほど」と実感を伴って自分の生活と健康が密接に関わっているという意識や、健康的に生きていこうとする意識を高めることを目的とした。

3. 研究方法

授業の効果を測るため、入谷らが作成した【健康帰属意識】5項目、【望ましい生活習慣の重要性】5項目、【自己の体に対する肯定的意識】5項目、【望ましい生活習慣の実践意欲】6項目、【体や骨に関する認識】9項目、【進んで実践する望ましい生活習慣】5項目の6つの尺度に加え、保健教育に関する学習意欲について調査するため「1.健康や体のことについてもっと知りたい」「2.健康や体のことについて学習するは楽しい」「3.健康や体についての学習は大切だ」「4.健や体についての学は生活に役立つ」「5.健康や体のことで気になったことは調べたい」5項目を【保健教育に関する学習意欲】尺度として追加し、7つの尺度から構成されている全40項目を用い7件法で回答を求めた。統計分析は、SPSS Statistics Ver.26を用い、有意水準は5%未満に設定した。時期(学習前・学習直後・学習10日後)を独立変数とし各尺度の平均得点を従属変数として対応のある一要因の分散分析を行った。

4. 研究結果

実践Ⅰの骨の学習では、学習の前後で【健康帰属意識】【保健教育に関する学習意欲】【自己の体に対する肯定意識】【望ましい生活習慣の実践意欲】【体や骨に関する認識】【進んで実践する望ましい生活習慣】の各尺度の平均得点に有意な差が見られた。

一方、実践Ⅱの消化吸収の学習では学習の【望ましい生活習慣の重要性】【進んで実践する望ましい生活習慣】の各尺度の平均得点に有意な差が見られた。

5. 考察

今回の研究で、調査及び授業後の自由記述から、45分間の学習で、児童の健康や体に対する「どうしてだろう」「なぜだろう」という疑問から教材を掘り起こすことで、「自己の体に関する肯定意識」や「体や骨に関する認識」を高めることで「自ら進んで実践する望ましい生活習慣」を高められることが明らかになった。

実践Ⅱの消化吸収の学習においても、実践Ⅰと同様のねらいをもち、消化吸収の仕組みと、排便と生活習慣との関連について学習を実践した。しかし、実践Ⅱの消化吸収に関する学習では「望ましい生活習慣の重要性」、「進んで実践する望ましい生活習慣」については向上していたが、「健康帰属意識」、「保健教育に関する学習意欲」、「自己の体に対する肯定意識」、「望ましい生活習慣の実践意欲」、「排便や消化吸収に関する認識」については高まりが見られなかった。

これらのことから、実践Ⅱにおいては児童に疑問を調査する時期と、授業実践までの時期に間があき、学年が変わったことにより児童の実態を捉えた授業づくりができていなかったことが課題であったと考えられる。

児童の疑問を捉え、実態に応じて内容を検討しや教材の工夫を行うことで児童に問って効果的な学習につながった可能性があると思われる。

【キーワード】保健教育 からだ学習 生活習慣